藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

新たな旅立ち・トルコへ

長崎二十六聖人記念館の入り口に「旅」と題した文章が掲示してある。

「人間は旅人である。旅をしながら歴史をつくるが、その旅路は人間を育て、精神的に豊かにする。…すべての旅のうちで最も優れたもの、それは神への人の心の旅である」

巡礼とは、そのような旅だと思う。

しかし、旅に出なくても日常の日々が旅ではないか、とも思う。日々の繰り返しである日常生活は変化に気づきにくい。でも一日々々が新しい旅であり、新しい出会いだと感じ始めた。年を取ったからだろうか。

巡礼の旅といっても観光旅行になっていることが多い。

トルコへの巡礼は観光旅行にならないように、一カ月前からアルコールを口にせず、旅に臨んだ。が、食事の時、水も有料なのでついついビールを口にする。

トルコを旅して一番感じたのは、トルコについて余りに無知であったことだ。

アジアの西端にあり、領土の大半は小アジアと呼ばれるアナトリア半島で、ボスポラス海峡を挟んだヨーロッパ側を合わせると日本の二倍の広さである。

トルコにはこのような遺跡が各地にある

オスマン・トルコ時代の最盛期には、アジア大陸、ヨーロッパ大陸、アフリカ大陸と三大陸にまたがる巨大な帝国を作りあげたが、ハレム中心の古い体制が近代化をはばんだ。

さらに第一次世界大戦でドイツ側について敗れ、支配地域が独立した。アナトリア半島の本土でさえ分割管理されようとしたが、このトルコ存亡の危機を救ったのが、現在もトルコの父として国民から愛され、尊敬されている初代大統領のアタチュルクである。

イスラム教が国教であったのを廃して政教分離を進め、女性が顔をおおうベール（ペチェ）の着用を禁止するなど近代化路線を進め、今日のトルコの礎を築いた。

小高い丘、ビルの玄関前などあちこちに国旗が立てられているので「きょうは何の祝日か？」とガイドに尋ねると、彼は笑って「トルコはいつでも国旗を立てている。個人の家でもよ」という返事だった。それだけ領土に対して国家を守るという意識が強いということを痛感した。

イスラム教が国教でなくなったとはいえ、国民の九八％がイスラム教で、スンニ派が多いそうである。

「アーガン」と呼ばれる礼拝の時間を知らせる祈りの声はモスクのスピーカーから一日五回流れる。

早朝、ホテルを出てモスクに入れてもらった。モスクはメッカが正面になるように建てられ、偶像崇拝禁止ということで何も飾りがない。

イスラムといえば原理主義者のテロを連想しがちだが、バレスチナで働く娘に言わせれば本来、イスラムは他宗教にも寛容で穏健な宗教とか。詳しいことはまだ勉強してない。

トルコでの第一印象は極めて親日的で、各地で遺跡が発掘されていて、まさに遺跡の宝庫である。少しずつ巡礼で紹介したい。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

トルコ巡礼の地図